

〈実践報告〉

「語り」が育む子どもの人間関係
—卒業前に行われた「希望の会」の実践から—

草間 信一 安曇野市立堀金小学校
土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

キーワード：希望の会，伝え合い，語り，卒業前の児童

1. はじめに

現在の小学校では、友人と良好な人間関係を築くことができず、個別の対応を求める児童が年々増えてきている。要因を特定することは難しい。しかし、言葉によるコミュニケーションを不得手としている児童が増えてきていること、相手の気持ちを押し量ったり自分の気持ちを伝えたりという経験が少なくなっていること、自分が周りからどう思われているのかを極度に気にする児童が増えてきていること、等のことが大きな要因ではないか、と筆者は考える。このような傾向は学年が進むにつれてより強くなっているというのが筆者の実感である

人間関係に多かれ少なかれ悩みを持つ小学生に対し、意図的に自らの気持ちを「語る」場を設定することが、良好な人間関係を育むきっかけをつくるのではないかと筆者は考える。このような目的で実施した「希望の会」の実践を分析することによって、児童の「語り」が持つ意味とは何かを明らかにすることを本論の目的とする。また「希望の会」開催までの児童の学びについても述べてみたい。

2. 一人ひとりが思いを「語る」場、「希望の会」の開催提案

平成23年3月。卒業式を3日後に控えた安曇野市立堀金小学校6年生のほぼ全員が視聴覚室に集合した。「希望の会」開催のためである。本校では卒業生のほぼ全員が同じ中学に進学する。若干の転校生がいること、クラス替えにより4クラスから3クラスになること以外は大きな変化はない。卒業までに各クラスで思い出作りをしたり、クラスとしての絆を深めたり、奉仕作業で感謝の気持ちを再確認したり…、どの学校でも実践しているような活動をしてきた。

しかし、卒業式が近づくとつれ、子どもたちからは「新しいクラスでやっていけるのだろうか」「実はあの人が苦手で心配」「私はいじめられるのではないか」という不安を担任に打ち明けるようになってきた。もちろん、中学校生活の学習への不

安、部活の不安、先輩との上下関係の不安などを打ち明ける子ども当然多い。子どもたちの不安の中身が自分たち同士の関係にあるとすれば、その不安を解消させ進学させることが急務であると学年会で話題とした。不安を抱えている子たちにさらに深く話を聞くと、以下の点が明らかになった。

- ①自分は中学に向けて前向きの気持ちでいるのだが、他の人たちがどう感じているのかわからないという不安。「良い学年にしようね」という気持ちは私だけなのか。
- ②みんなが何を考えて卒業を迎えるのかわからない。私自身のこともよくわからない。みんなの気持ちが知りたいという気持ち。
- ③感謝の言葉や謝罪をどうしても友だちに伝えたいけれど、その機会がないままここまで来てしまったという後悔。

幸いにもこの学年では、2月の最後の参観日に、「将来の夢」「小学校生活の思い出」「伝えたいこと」というテーマで作文を暗記し、お家の方の前で発表したクラスが複数あり、人前で自分の気持ちを伝えるという経験を積んでいる子が半数以上いる。そういう条件であるならば、子どもたちに自分の気持ちを伝える場を与え、自由に発表させてみようではないかということに決まった。実施1週間前に児童全員にプリント配布し、「希望の会」を開催することを伝えた。自由参加であること、参加者がいてもいなくても先生たちからは指導をしないこと、あくまでも自分たちの未来のための会であること、友だちに伝えたいことがあれば伝えようじゃないか、という点を強調した内容である。

3. 「希望の会」実施までの子どもたちの学び

この学年は、自分の意見を主張することに力を入れてきた学年でもある。あるクラスでは、毎朝のスピーチ、テーマを与えた作文指導を年間通して行ってきた。あるクラスでは、信濃毎日新聞の投書欄「10代から」のコーナーを毎日読み合わせ、意見を言い合うということが続けてきた。こういった活動が続けてきたことで、子どもたちはどのようなことを感じているのだろうか。

- 友だちが私と同じことを考えているんだとわかったら安心できた。私1人だけの考え方のような気がして、とつても不安だったから。
- いつもふざけているY君が、あんなにマジメな意見を言うことに驚いたし、素直に感心した。あんな奴でも良いこと言うなあ、と、ちょっと見直した。
- いろんな考え方があるんだなと思っただけじゃなくて、安心して自分の言いたいことが言えたのがうれしい。そういう雰囲気になってきたから言いやすくなった。

つまり、自分の言いたいこと、主張したいことを聞いてもらえる安心感を学年全体が育んできたということが言える。それは、様々な考え方に触れる機会が多くなり、多様な考え方を認め合うことにつながっていくのである。このような段階を踏んだ学年であることを押さえておきたい。

「希望の会」開催3日前。クラスの中では「どうする?」「発表しようか」「でも…」という子どもたちが葛藤している様子が伺うことができた。教師側から介入しないという約束ではあるが、不安になったので学級で聞いてみた。「今度の希望の会は、この前のプリントのように開催するのだけれど、発表してみようって思っている人はいますか」クラスで10名ほどが手を挙げた。これなら大丈夫だ、きっと誰かが口火を切って言いやすい雰囲気になったら、続けて発表者も出てくるだろうと安心した。

ところがである。この日の昼頃から、6学年全体にインフルエンザの猛威がおそってきた。早退者が続出、希望の会の開催どころか、卒業式さえ危ぶまれる状況になったのである。発表してみたいと希望していた子たちが軒並み早退する事態となり、このままでは会が成り立たないかもしれないなど一抹の不安がよぎった。

4. 「希望の会」の開催

当日、欠席者は111名中14名。「最後の機会だから」と開催することを決定する。加湿器を設営する他は、特別な用意をしなかった。代表の先生が「あくまでも自分たちの会にしてほしい。先生達は口出ししない」ことを宣言し、会がスタートした。

5分ほど経つが、発表者は出てこない。しきりに担任の先生の所に相談に行っている子はいるのだが、踏ん切りがつかないようだ。担任は「発表してみなよ」と勧めることもせず、会場の後ろの方でひたすら待っている状態である。ひとしきりザワザワしている場所がある。数人で集まって相談しているようだ。「行きなよ!」「応援しているよ!」「大丈夫だよ」「あたしも行くから」という声が聞こえてくる。



会が始まってから10分後、とうとう最初の発表者が前に出てきた。ザワザワしていた会場が水を打ったかのように静まりかえる。

「恥ずかしいのでみんな、顔を伏せて下さい・・・」

その言葉に何のためらいもなく全員が顔を伏せる。

「私は、みんなに本当に支えられて、本当に助けてもらって卒業までこれました・・・」

泣き出す彼女。

「本当に、ありがとうございます。中学でもよろしくお願いします」

号泣している彼女に嵐のような拍手が起こる。学年全員の前で発表できたうれしさと、みんなが真剣に聞いてくれた喜び、そして今までのことを思い出した涙だったと後の感想文に彼女は記入している。

続けて5分後に2人目が登場した。最初の彼女の発表がかなりのインパクトがあったため、次の子が発表するまでにはざわざわした雰囲気が続いた。教師から「お互いに相談するのは良いが、ふざけた雰囲気を作らないようにしよう」と声をかけると、すぐに収まった。彼女は、中学に向けて、自分たちで良い学年を作っていこうと宣言をした。同じように大きな拍手が起こった。ここからである。切れ目なく次々と発表者が前に出てきたのである。

○私は、この学年でよかったと心から思っています。みんなに優しくしてもらったし、親友もできた。みんな本当にありがとうございます。中学でもよろしくお願いします。

○1組のRさんへ。この前、ちょっとしたことで意地悪なことを言ってしまっておめんね。いつも一緒に帰ってくれてありがとうございます。Rさんがいたから私は毎日学校に来れたと思います。これからも親友でいて下さい。

○一緒にバスケットをやってきた仲間へ。ぼくは途中から入ったらヘタクソで、みんなの足を引っ張ってしまいました。そんなぼくをいつも応援してくれて、ミスをしてでもドンマイと行ってくれたのが、すごくうれしかったです。中学でもバスケットやるから、またがんばろう。ありがとうございます。

○K先生へ。私が全然勉強ができなくて、それでもいつも放課後に教えてくれて。縄跳びの時もずっと応援してくれて、私はすごく感謝しています。先生、ありがとうございます。

○Mさんへありがとうございますを言いたいです。Mさんは、どんなに機嫌が悪くても私には明るく挨拶をしてくれたし、休み時間にも一緒に遊んでくれました。Mさんのようになりたいとずっと思っていて、私もあいさつをがんばるようになりました。Mさん、中学でもよろしくお願いします。ありがとうございます。

○ぼくは転校してきて、ずっとさみしい思いをしていた。でもR君やH君がいつも誘ってくれて遊びました。本当にありがとうございます。

個人的な感謝の気持ちを述べている子たちは、発表途中で泣き出してしまふ。聞いている子たちももらい泣きしてしまう。会場は異様な、しかし温かい雰囲気に包まれていた。

5. 奇跡のような出来事

本学年には、場面緘黙の児童が存在する。同じクラスでも彼女の声を聞いたことがない子が多い。彼女のクラス全員が前に出てきた。その場で相談して「全員で先生への感謝の言葉を言おう」という雰囲気になったようだ。数分前にあるクラスが感謝の言葉を全員で言い、自分たちも全員で言おうということになったらしい。彼女のクラスは1人ずつが短い言葉で先生への感謝の言葉を言うという内容で発表を始めた。彼女の順番になった。彼女は何の違和感もなく「先生、今までありがとうございました」と言ったのである。周りの子たちも「えっ？」という顔もせず、当たり前のように発表を聞いている。驚いたのは担任一同である。まさか学年の前で声を出すとは…。彼女のことをずっと支えてきた担任の先生は涙で顔をくしゃくしゃにした。

低学年のころにイジメを受け、その時のつらかった気持ち、そしてその時に支えてくれた友だちへの感謝の言葉を発表した子もいた。「私は3年生の頃、多くの人からいじめられていました。陰口を言われたりして、学校になんか来たくないと思っていました。でも5年生になってから、たくさんの友だちができたし、優しくしてもらってから私は学校が好きになりました。クラスのみんな、特にYさんRさん。本当にありがとう。」

5年生の途中で転校してきて、複雑な家庭環境の中、欠席を繰り返して、登校すると友だちとトラブルを起こしていた子が先生に対して感謝の言葉を述べるという場面もあった。「僕は5年生の途中で転校してきて、K先生には本当に迷惑をかけました。でもずっと僕のことを心配してくれたり、運動会だって家族が見に来れないけど、先生が僕の写真を撮ってくれて後で届けてくれたりして、本当にK先生にはお世話になりました。ありがとうございました。」

皆、自主的に発表しているのだが、本当ならば語らなくてもよい、そのまま過ぎてしまっても構わないような内容まで素直に発表している。この雰囲気はいったい何なのだろうか。ほとんどの子が発表者となり、「自分も行かなくては」という軽い気持ちで前に立つ子もいただろう。順番を待っている間、何となく照れくさそうな感じで友だちとふざけあっている姿も見られた。しかしそういう子たちもいざ発表するとなると感極まって泣きそうになるのである。

「あいつが本気になって言っている。泣きながらありがとうって言っている。」

「みんなの前で泣いてもいいんだ。恥ずかしいことじゃない。それよりもありがとうって言いたい」

そうやって感想に書いていた子もいた。どこか現代の風潮として「真面目なことがバカらしい」「お互いに足を引っ張り合って素直な話ができない」「人をバカにする

ことで笑いをとる」のような雰囲気があるのだが、この子どもたちの様子を見ると、「本音は真剣な真面目な話をしたい」、「お互いに本音で語り合いたい」という願いを持っているのだろうということがわかる。

6. 「希望の会」を終えた子どもたちの感想より

小学校では、授業後に感想文を求めると、喜んで書く子は少ない。ところが今回に限っては文句ひとつ言わずに黙々と書きつづけていた。友達の「語り」に影響され、自らの伝えたい気持ちを文章にしていたと考えて良いだろう。

○最初に発表してくれたHさんがいなければ、この会はダメだったと思う。Hさんはすごい。私も最後に発表してみたけど、すごくすっきりしたし、発表してよかったと思う。中学に向けて不安だったけど、この学年のみんなとなら大丈夫だと思った。

○私はどうしても先生に対してありがとうを言いたかった。でもみんなの発表を聞いている途中で涙が止まらなくなってしまって発表できるような状態じゃなくなってしまった。先生、この場を借りて言います。本当に2年間ありがとうございました。

○友だちからありがとうって言われて、本当にうれしかった。うれしいのに涙がいっぱい出てしまった。こういう涙ならまた流しても良いなと思った。

○本当にすばらしい会だった。みんながこんなにありがとうって言えて、泣いている人もいっぱいいて、感動の連続だった。

○今まで恥ずかしくて言えなかったのに、今日はみんながやっているから言えた。みんなにも感謝したいし、こういう会ができたことにも感謝したい。卒業式が楽しみ。

○今日が卒業式みたいだった。私もこの学年の一員なんだと思ったら、とてもうれしくなった。良い仲間めぐまれて、私は幸せな小学校生活を送ったんだなと思った。

○こんなに緊張したのは初めてだった。人に向かって「ありがとう」って言うことがこんなに難しいとは思わなかった。でも勇気を出して言えたし、みんなの前で泣いてしまったけど、だれも笑ったりしなかった。最高の会だった！

7. 「希望の会」開催の意義

子どもたちにとって、「気持ちを伝える」ということが、どれほどの力を持っているのかということを改めて感じさせられたわけである。現代の子はコミュニケーション力が低下していると言われている。実際に、コミュニケーション不足による

トラブルが頻繁に起こり、担任が仲裁に入らなければ解決できないことが増えてきている。この学年の子たちが、トラブルを自分たちの手で解決できる傾向があったことには、「気持ちを伝え合う」ことにしっかり取り組んできたことも要因の一つとして考えることができるだろう。そんな子たちでも、このような会で発表することには若干の抵抗があるのだ。気持ちを伝え合った子たちの表情は晴れやかで、しかも会の後、卒業式までのわずかな時間ではあるが、より親密に友だち同士で話し合ったり、自然に「ありがとう」「ごめんね」と声をかけるようになった。「伝える」ことの良さを、自分が発表することを通して実感したからこそであろう。

右の写真は、希望の会で発表した児童の写真と、その内容を全て書き出し、廊下に掲示したものである。会にあたっては、担任はまったく口出しもしなかったが、内容をすべて記録しておいた。その内容の素晴らしさに感動し、担任一同、卒業式前の忙しい時期ではあったが、遅くまで残って掲示物を完成させたのである。



子どもたちは、この掲示物の前で無言で内容を読んでいる。涙を拭いている子もいる。卒業式当日には、掲示物の前で写真を撮ってもらう姿も見られた。ある保護者からこの会の翌日に連絡をいただいた。子どもが卒業式前に目を真っ赤にして（腫れ上がった目で）帰宅したことを心配し、本人に聞いてみたところ「希望の会で泣きすぎてこうなった」ということであった。この方からは次のような感想を寄せていただいている。「素晴らしい会を卒業式前に開催していただき、本当にありがとうございました。娘が目を腫らして帰ってきた時には、いじめられたのではないかと心配しました。しかし話を聞いてみて、こちらまでもらい泣きしてしまいそうでした。素晴らしい会を企画していただき本当にありがとうございました。また、ここまで育てていただいて本当にありがとうございました。」

8. おわりに

現在、この子たちは中学校に進学した。中学校の入学式、お互いに真新しい制服に身を包み、希望を持って中学校の門をくぐった。数名の子たちが校門のところで、登校してくる自分たちの同級生に「おはよう」「がんばろうね」「よろしくね」と声をかけていたという。はにかみながらも笑顔



で「おう」「よろしくな」と返答する男子生徒の姿を想像すると微笑ましくなってくる。中学校での1学期を終えた子どもたちが小学校に遊びにやってくることが多い。

「男子が先輩達の真似をして、ちょっと不良っぽい行動をしているけど、別に怖くない。だって根はいい人たちだからね」

「クラスマッチとかいろいろあったけど、楽しくやってるよ。自分たちで良い学年にしていこうって気持ちが伝わってくるからね。いざという時はみんな協力できるよ」

「先生、さっそく同級会やろうって話になっているけど、都合はどうですか」
子どもたちの会話を聞いていると、お互いに自分の気持ちを伝え合った経験が活かされていることがわかる。相手のちょっとした行動や言動に傷ついたりすることも多い中、「あの人にはこんなに良いところがあるんだ」「あの人は本当はいい人なんだ」という気持ちで友だちを認めることができ、逆に「私のことをわかってくれる人がいる」「私の気持ちを伝えることができる仲間がいる」という気持ちで過ごすことができているのだろう。

この「希望の会」が果たした役割について、この子たちが大人になった時に、語ってほしい、そして、自分たちが未来を切り拓いていくために、この会が大きな力の源となる経験であってほしいと担任一同は願っている。

参考文献

- 草間信一・土井 進 (2009) 「良好な人間関係をはぐくむ『ありがとう大作戦』
一友の良さを感じ、その良さを取り入れ、自ら実践していこうとする子どもを願って一」信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』No.10
pp. 81～90
- 草間信一 (2009) 「自分という存在に気づき、自己概念を深め広げていく道德教育
の実践」『日教組第59次教育研究全国集会報告書・人権教育』pp. 67～75
- 草間信一 (2010) 「子どもが語る『学級づくり』のヒント」、『信濃教育』第1498号
pp. 93～108

(2011年10月11日 受付)

(2012年1月20日 受理)